



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

STUDENT TESTIMONIAL



南佑弥(ミナミ ユヤ)さん (加藤学園暁秀高等学校 2019年度卒)

2019年度、加藤学園暁秀高等学校を卒業し、IBスコアを活用してシンガポール国立大学、経営学部へ進学。興味は人材管理から金融へ。現在3年次在学中。

「クリティカルな複数の視点から考察するスキルが身につきました。
あえて競争の激しい環境で挑戦し、将来は世界の金融のハブであるシンガポールで活躍したいです。」

両親の海外赴任がきっかけとなった英語での教育。それからのIB教育を通して自分の努力が軌道に乗っていくのを実感した。

幼少期を日本で過ごし、公立小学校に通うごく普通の小学生でしたが、3年生の時、両親のタイのバンコクへの転勤があり、迷いましたがインターナショナルスクールに転校しました。小学校6年生の夏に帰国、英語力を維持するため中高一貫校の加藤学園暁秀高等学校に入学し、MYPで4年間、IBDPで2年間学びました。

当時はIBのカリキュラムについて詳しい知識を持ってはいませんでした。IBDPを取得したことでそのスコアを活用して、日本、アメリカ、オーストラリアの複数の大学にApplyし、最終的に第一志望だったシンガポール国立大学(NUS)に合格することができました。

JASSOの給付型奨学金、また生活費の給付を受けることも叶い、この8月からは大学3年次がスタートします。

新たな価値観を見出せたIBディプロマの授業。一つの事象をクリティカルシンキングで複数の観点から常に考察する姿勢が習慣に。

IBDPの選択科目としては英語:文学と言語 HL、日本語:文学 A HL、歴史 HL、数学 SL、化学 SL、中国語:初級 SLを取っていましたが、特に、歴史と文学の授業は、先生の話がとても面白く、いつも聴き入っていました。歴史の授業では「様々な視点から歴史的出来事を見る」と

いう評価基準があり、一つの歴史上の事実を、複数の視点から考察することが求められるため、私は一つの事象についてクリティカルに考える事が習慣になり、大学のエッセイでも役に立ちました。IBで得た学びの姿勢はシンガポール国立大学の教授からも高く評価されたことがあります。

歴史を学ぶ中で特に、明治時代の日本が危機感を感じて鎖国から開国に至った頃、海外経験のある若いリーダー達が、新しい国づくりに貢献し、国を牽引していったところなどは大好きです。日本もこれから歴史に残るような変化を迎える時には、やはり若いリーダーが誕生して、それを成し遂げていくのではないかと感じました。自分もまたそういった人材になりたいと思いました。

文学の授業では、この世界には私がまだ知らない価値観がこんなにもたくさん存在するんだという事を知りました。例えば、人種、ジェンダー、お金、格差に関することなどで、特に『すばらしい新世界』という書籍を通して授業で学んだことは印象的でした。

シンガポールでは、外国籍の労働者の方々の姿から、資本主義の上に成り立つ厳しい格差社会を実感する時があります。そういった社会の事実を目にする時も、文学の先生が話してくれた事に通じるものがあるなと感じます。

シンガポールの大学への入学を決めたのは、ダイバーシティ戦略への魅力から。そして Open Minded な自分の特性を活かしつつ、他人と比較しない努力を続ける。

シンガポールという国に初めて興味をもったのは、まだ小学生の時、現地を訪れた時の事です。「東京よりもキレイな町だな」という印象。そして、中学校の頃から、世界ランキングでもトップのシンガポールの大学で優秀な学生に囲まれて学ぶことができたらいいな、という漠然とした憧れを持っていました。

また、シンガポールは多国籍国家なのにダイバーシティ戦略がうまくいっているように見え、どうやってこの国の仕組みを維持しているのか、知りたいと思っていました。私は自分では精神的に強く、自己肯定感も高い方だと思っていて、人からは IB 教育の掲げる「10の学習者像」では「Open minded」だよね、と言われます。人に対して寛容だ、とか、男女も文化の違いとかも関係なく誰とでも打ち解けて仲良くするよね、と。

それでも、シンガポールの大学へ進学するために、成績を伸ばし、英語も出来るようになりたいのに、うまくいかなかったり、自分は社交的じゃないなと思ったりして、落ち込むこともありました。そうした不安定な時期を過ごし、自己嫌悪する中で、ある時「それはコツコツ努力して少しずつ直していけば解決できる問題だ」と気付いたのです。自分で考えに考えて、自分自身のことは嫌にならないで、時間をかけて一つ一つやっていこうと決めました。みんなそれぞれ色々あると思うんです、でもやっぱり、自分自身のことは好きでないと。それが私の結論です。

私は大学4年間はしっかり勉強して時間を無駄にしないと思っていたので、競争も激しい環境なら、きっと勉強に集中できると思いました。大学では、IBDP2年間分の勉強量・内容と同じものを1学期で終わらせるスピードで勉強をしています。相対評価なので、本当に良い成績を取れるのは、ごく一部のトップの学生だけ。中には大学での成績が就職に大きく影響すると考えて、強いストレスを感じている学生もいます。

勉強は確かに大変ですが、私はあまり周りと自分を比較せず、着実に努力するようにしています。就職もシン

ガポールでと考えていますが、私のような外国籍の学生が就職する場合は、ローカルの学生との成績の比較はないという状況もあって、割り切って勉強ができているのかもしれない。

興味は人材管理から金融の分野へと。

大学に入学したばかりの頃は、ビジネスの分野の人材管理について学びたいと思っていました。ただ、シンガポールでは町に金融のビジネスが動いている息吹があり、金融を専攻に選ぶ学生も多いです。ハードコアというのか、一度身につけたら一生涯、役に立つ知識だと、先輩にも言われました。金融がとても身近で重要なものに感じられて、自分も金融を専攻したいと思うようになりました。将来は、世界的にも金融ハブとして発展しているシンガポールで、金融の分野で活躍したいと思っています。

現 IB 生と IB 教育下でこれから学ぶ方々へのメッセージ

今 IBDP で頑張っている人や、これから IBDP を始める人たちにも「自分がやっていることは間違いない」と思っ
てほしいです。残念ながら今必死に暗記していることは卒業後まもなく忘れてしまいますが、IBDP で学ぶ過程で得るソフトスキル（タイムマネジメントやコミュニケーション力）は、大学でも社会でも必ず役に立ちます。点数や勉強時間など、数字みたいなものだけに執着せず「学びの過程と人間としての成長」を重視することによって、IB 教育の最大の効果が発揮される、と伝えたいです。

私が IBDP で得たものは、本当に素晴らしいものだったと思うので、もっと認知され、多くの学生にこういった教育を受けてもらえる日が来て欲しいと思います。日本語での DP も普及しはじめて、海外の大学への門戸がますます開かれていくと思いますし、奨学金制度もあります。受験制度は毎年変化しますが、第一志望であった大学は少なくとも私の年は、IBDP のスコアを活用し、受験はとてもシンプルでした。ぜひ、みなさんにも海外の大学に挑戦をしてほしいです！